☆☆ニュースレター☆☆

第168号
発行日：2020．11．9
（since 2006.2.1）

このニュースレターはメールを登録している正会員および賛助会員のほか当団体が了承した希望者に、随時配信しております。
配信中止を希望のかたは右記までご連絡ください。

NPO 法人・クライネスサービス
会　長　：稲垣　正彦
編集・発行責任者：事務局長・小林　弘司
千葉県佐倉市宮ノ台３－２－２
npo-kleines-463@catv296.ne.jp
TEL/FAX：043-463-1337
http://www.catv296.ne.jp/~kleines/

前号第 167 号の発行からすでに 3 ヶ月も経過し、今年も残すところ、12 月のみとなりました。米国大統領選挙も結果はいまだ混沌としていますが、会員のみなさま如何お過ごしでしょうか。会員から投稿もありましたので、第 168 号をお届けします。

会員投寄稿　－47－「やっぱりカラオケ」

（岩浅博彰）

クライネスの皆さんと楽しく唄っていたカラオケ会も開催出来ず、他の友人達とも集まれず、おおいに欲求不満を募らせています。「うーん、コロナウイルスめっ」。そんなことを思いつつ、パソコンに書き溜めていた昔から知っている歌や、新しく覚えた歌が770曲を超えました。その中には唄いたくてもカラオケ機に入っていない曲が沢山あるのですが、口ずさむとその曲がヒットしていた若かりし頃を思い出します。橋幸夫の「シンガポールの夜は更けて」は股旅演歌から一転、バラード風の奇麗な曲でした。三橋美智也の「雨の九段坂」は感情を込めて唄っていると、途中でじ-んと来て声が上ずりそうになる程でした。江夏圭介と酒井和歌子の「大都会の恋人達」などは、こんな素敵な恋をしているカップルもいるのだろうなあと、羨ましく思いながら聞いていました。

カラオケ好きのみなさん、コロナから解放されたらまた「カラオケ会」で集まりましょう！（7/23 岩浅）

編集担当のつぶやき

「コロナとカタカナ語」

165号でも言及しましたが、今回の「新型コロナウィルス」騒ぎでは日本中、いや世界中でかつて経験したことがないほど異様な生活を強いられています。行ったことがない地へ旅に出る、家族と食事に出たり、または友人たちと飲み会をしたり、孫たちと自由に行き来したり、つまりごく普通の生活が出来なくなりました。

それにしても「コロナ」がニュースになってからというもの、やたら耳慣れないことばがメディアで頻出しています。「COVID19（Corona Virus 2019）」から始まり、PCR、クラスター、テレ（リモート）ワーク、パンデミック、エクモ、エピセンター、東京アラートから、ガールズバー、ホストクラブ、ソーシャル・ディスタンス更には「ウィズコロナ」というカタカナまで、ほぼ英語のオンパレード。日本語で言えないこともないとの意見もあるが、知らないうちに巷間では口の端に上がりその言葉で話が通じているから不思議です。そもそも、英米では“coronavirus”を「ヴァイラス」と発音しているのに日本語では「ウィルス」となったのはなぜだろうか？オーストリアの首都「Vienna」が「ウィーン」と発音する所以か。

アルコール　飲むより先に　消毒ね　　（○○商店街優秀川柳）